

再考、鈴木大拙「大地」の思想——地質学との接点を求めて

An attempt to find the connection between geology and philosophical thought
by focusing on D. T. SUZUKI's "Earth" philosophy

水野友晴

MIZUNO, Tomoharu

関西大学文学部

(Faculty of Letters, Kansai University)

Abstract

In order to find a new view of life that differs from the anthropocentric view, we are forced to reevaluate the civilization we have created from the perspective of resource and environmental utilization. In this paper, I focus on the central concept of D. T. SUZUKI's philosophy, "the earth." D. T. SUZUKI analyzed urban modern life as a denial of humanity, and he argued that in order for people to recover their humanity, it is necessary to reevaluate "life on the earth." This reevaluation will enable people to find a refuge from the dehumanizing movement and to maintain their nobility and dignity even in the midst of urban modern life.

要旨

これまでの人間中心のあり方とは異なる新しい生き方を見いだすため、われわれはいま、人類がこれまでに作り上げてきた文明を、資源や環境の利用という観点から再評価する必要に迫られている。このような再評価の動きに呼応し、なおかつ地質学と人文学との協同の可能性を探るべく、本論では鈴木大拙の「大地の思想」に注目したい。大拙は都会の近代生活を人間性を否定する方向にあるものと分析し、人々が人間性を回復するには、人間の生と大宇宙の永遠性が交流する「大地の生活」の再評価が重要であるとした。この再評価によって人々は人間性否定の動きから退避できる避難所を確保でき、都会の中にあってもみずからに崇高さや威厳を保ちつつ生きることが可能となる。

1. はじめに

どのようなことに意義や目的を設定すれば、人文学と地質学との有意義な協同を思い描けるか。本稿では世界的な仏教哲学者として活躍した鈴木大拙(1870-1966)の「大地」の思想、とりわけ1942年の彼の講演「大地と宗教」に注目し、宗教をはぐくむものは大地であるという彼の見方が、未来世界における地球と人間という問題についてどのような

意義を有し、また人文学と地質学との協同の可能性を開くものであるかについて考えてみたい。

2. 未来世界構築のために日本の経験を再評価する

原田憲一はその著書『地球について——環境危機・資源枯渇と人類の未来』の最終章を次のように始めている。

「46億年まえに誕生した地球の歴史を一年分のカレンダーに縮めて、あとわずかでの一年が終わるとしてみよう。1月1日午前0時に地球の歴史が始まるが、2月末頃、初めて生命が誕生した。当時の進化は遅々たるもので、11月上旬になって、ようやく骨格をもつ生命体が出現した」。

50億年の歳月を一年分に変換したこのカレンダーにあって、そこに記載のイベントはその後、脊椎動物の出現（11月第4週）、哺乳類の出現（12月10日）、恐竜の絶滅（11月26日夜中）、霊長類の出現（11月27日早朝）、二足歩行する霊長類の出現（12月30日21時）と続く。大晦日の午後6時頃ようやく「人類革命」が起きることになるが、「農業革命」によって人類人口が増えてゆくのはその「1分ちょっと前」であり、「科学革命」や「産業革命」に至っては、除夜の鐘の最初のひとつきを耳にする2秒前のことである。

以上の事情を踏まえて原田は次のように問題提起する。「このような生命の歴史からみても、最後に現れた新参者でしかない人類が、この地球を未来のない「スペースコロニー」に改造することは、果たして許されることだろうか。仮りに百歩譲って、地球がもともとある種の「宇宙船」だったとしても、われわれは他の乗組員にとって代わって、船長や機関長として自由に動かせる程、この宇宙船のことを隅々まで十分理解しているだろうか」。

現代の、そして地球における人類の地位について問いかけるこの問題提起について、原田自身はそれに悲観的な思いを込めているようである。「最初は新参者としてひっそり座席を確保して、乗船者の一員として礼儀正しく振る舞っていた。しかし仲間の数が増えてくると、自分たちだけの部屋を確保した。それぞれの役目を果たしていた先住者を追い払い、しきたりを無視してわがままな振舞いを始めた。ことに最近では、地球全体が人類だけのものであり、乗客や乗員も人類だけであると錯覚し、浄化装置に毒を投げ込んだり、空調装置の機能を麻痺させたり、客室にゴミを撒き散らしている」。

このような状況で終わろうとしている今年のカレンダーであるが、続く来年、すなわちこれから50億年間のカレンダーにあっては、人類についてのどの

ような運命がそこに記載されているのだろうか。原田は期待を込めて、「新しい生き方を生み出す必要がある」と述べる。原田によれば「新しい生き方」は、全く白紙の状態から創出されるわけではなく、「大陸の諸地域で人類が今までに作り上げてきた文明を、資源や環境の利用という観点から再評価」することから生まれ、殊に「厳しい資源・環境制約のもとで独自の文明を成熟させた日本の経験は、一つの指針を与えるもの」と期待を寄せる。以下、簡単な研究報告として、そのような「日本の経験の再評価」について人文系の学者からはかつてどのような発言が見られたか、戦前から戦後にかけて活躍した世界的な仏教学者である鈴木大拙の「大地の思想」からそれを探り、地質学との接点について考えてみたい。

3. 「大地の生活」は「永遠性」にふれる生活

鈴木大拙における「大地の思想」は主著『日本的靈性』（1944〔昭和19〕年）においてはその根柢をなし、さらに日本が太平洋戦争に敗戦した後の彼の著作にあって、日本が再生するための根柢とすべきものとして位置づけられる、大拙の基本思想の一つである。「大地」の語を大拙が使用し始めるのは『日本的靈性』の執筆時期よりも古く、たとえば「大地と宗教」（1942〔昭和17〕年）と題された講演に既にしてそれは見られる。まずは「大地と宗教」における「大地」の用例について確認してみたい。

「大地と宗教」の主旨について、大拙は講演中で次のように語っている。「私の大体の主張は、宗教を生かして行くには、大地を離れては出来ないと云ふことなのであります。吾等人間は大地を離れては生きて居られないのだから、吾等にとつては、宗教はなくてはならぬところのものです。ところが、今日の時勢と申しますか、時代と申しますか、これが甚だ宗教と遠ざかるやうな方向にのみ進んでみると云ふことは、人間性そのものを否定する方向に進んでみると云ふことになるのであります。そしてそれは、今日吾等の犯しつつある誤りであり、それを克服するにはどうしたらよいか」。

大拙の発言の真意を探るため、三点を確認することにしたい。第一に、今日の時勢が人間性を否定する方向に進んでいるとは、どのようなことを指して

の発言なのか。第二に、宗教を生き延びさすには大地を離れてはならないとは、どのような意味合いのことであるか。第三に、宗教の賦活は今日における人間性の否定にどのように関係することなのか。

第一の点については、大拙は「近代生活は全く人工的になる」、「近代の都会生活は段段自然と云ふものを離れて行く」といった発言を行っている。

この講演で大拙は、住居、家族、機械工場生産を例に、近代の都会生活の特徴について語っている。近代生活における高層住宅は、設計や建設時に抽象的な計算を駆使しなければ建たず、建築後も照明や換気、冷暖房、エレベーターなど人工的な設備の助けを借りなければ十分に機能しない。高層住宅に起居することは、周囲の自然環境と隔絶した人工的環境に身を置くことを意味する。

大拙はまた、都会における住居は永住・定住を意図して建てられてはおらず、しかもその大半は借家であって、人々はその間に一時的に居住するに過ぎないと語る。「此処に先祖が住んでみた、自分の親は此の部屋に居た、自分の祖母さんは此の布団を拵へた、勝手にある俎板、庭にある鋤・鍬も、祖母さん祖父さんが使ってきたものだ」という歴史性は、都会の暮らしの中にはない。墓地についても同様であり、移動が頻繁に起こる近代生活にあっては親子が一つの墓に入れれないといったことが起こってくる。都会生活にあって住居が一定せず、墓地についても同様であることは、「先祖代々」という歴史性を都会の家族が有しないことを意味する。現代の都会にあって親族や近隣が家族意識で結ばれる範囲は、かつてに比べて極めて狭い範囲に限定されている。

機械工場生産について大拙は、靴の生産を例に次のように語る。大量生産を旨とする機械工業生産においては、「一つの機械では、カガトだけを作る、又一つのは、爪先だけを拵へる」といった具合に分業による部品生産が行われ、最後にこれら部品が組み合わされて靴が出来上がる。しかしこれによって職工はそれら部品ごとの生産には習熟しても、「靴の全部はどうして造られるかと云ふ肝腎なことになると、自分は何もわからない」という無知状況に置かれてしまう。職工は靴を作っているつもりでいても、実態としては、靴を組み上げているのは機械システム

であり、すべてを統べているのは設計図であるということになる。つまり職工は、自分が靴を作るという主体性を機械によって奪われてしまっている。そこにあっては人間は機械システムの一部となってしまうとあり、人間が人間らしく行動することが許容されなくなる。

このように大拙は、近代の都会生活にあっては、人々は外部から隔絶した人工的環境の内に暮らし、しかもそれは定住なき「一時的」生活であり、そこにあって人間は機械に頼らないことには完結しない非主体的なものとして化していると語った。

これに対して地方の生活にあっては、そこにはいつ建てられたかも知れないほど古い家に住まう人々がいる。先祖代々維持されている墓もある。農業や家族工業における労働はその全体像がわからない分業ではなく、どのような役割を自分が分担しているかが把握可能な協業である。

こうした地方の生活は大拙によって「大地の生活」と語られる。「大地の生活」が注目されるのは、都会の「一時的」とは対照に、それが「永遠性」に触れる生活であると彼が見るからである。大拙は次のように語る。「大地はこれに反して、誠に永遠性そのものである。さうして都会的近代生活をせぬ地方人はこの永遠性を有してゐる」。

途方もなく古い築年数といった時間的な面にも大拙が注目する「永遠性」は顔を覗かせているが、大拙は地方の生活の隔てなきに特にそれが見られると感じている。たとえば地方のお宮は、杉や松の老木が繁った森の中にあることでその荘厳さが保たれる。お宮の荘厳さはお宮単体によって担われているのではなく、お宮と周囲の森とで醸されている。また、先祖代々の墓があることで、家族の範囲は生者だけでなく地下に眠る先祖にも広がってゆくことになる。ここでは地下と地上、死者と生者との隔絶が絶対的ではない。

さらに、人間と大地の協業の最たるものといえる農業にも隔てなきは現れている。人間は独力で農作物を栽培することはできず、起耕、播種、遣水、収穫など農作業は常に大地と向き合いつつ行われる。農業にあっては、人間はむしろ自然の化育の働きの一部となって、自然による作物の生育に参加する観

がある。人間と自然が隔絶されるのではなく、むしろ一体的となって働くことがそこにはある。

以上のことを鑑みれば、大拙がいう「大地の生活」が、人間とその周囲とが隔絶されず、人間の行いの中に周囲の働きが引き入れられており、同様に周囲の働きの中にも人間の働きが一体的に入り込んでいくという、働きの相互貫入的融合の事態を看取してのものであることが見えてくる。ここでいう周囲の働きは、その範囲を拡げてゆけば最終的に宇宙全般に通底する無限なる働きにまで行き着こうから、「大地の生活」における人間の行いの中には、宇宙大の無限なる働きが入り込んでいることになる。かくして人間の働きに大宇宙の無限なる働きの片鱗が見出されることで、そこに崇高さや威厳といったものが見出されることになる。宗教が生き延びるには大地を離れてはならないとの大拙の主張は、このようにして「大地の生活」の隔てなさを通じて、人間の行いに崇高さや威厳が伴われてくることを指している。

それでは、「大地の生活」がその隔てなさから宇宙大の働きと交わり、崇高さや威厳を帯びてくることは、近代の都会生活における人間性の否定に対してどのような効果を発揮するのだろうか。

この問いに対する大拙の返答には幅が見られる。彼は「近代生活は中止する訳には行かない」とした上で、「都会のやうに、大地がコンクリートやアスファルトで敷きつめられ、電車がきしり走る処からは宗教は出ない」として、人々が都会的生活にある限り人間性を否定する傾向に歯止めがかかることはないとの見解を示す一方で、「人間性への還帰とでも云ふべき欲求が、吾等すべてにあるのです。この欲求は、人間が人間的な生活〔中略〕を離れば離れるほど、その反動として強く、或は無意識的にも知れぬが、それ故に、絶対的・支配的に人を動かすものだと思ひます」とも語る。

この幅をわれわれはどのように受け止めるべきだろうか。大拙の見解にもあるように、都会生活を送る人間もそこにある人間性の否定を諸々と受け入れているわけではない。彼らもまた居心地の悪さを感じ、人間性の回復を希望している。したがって都会生活にある人間からも、やせ細り途切れんとしている大地との紐帯を再び太く確実なものとしたいとす

る動きが生まれてくることは期待できる。その一方で、都会生活そのものからは人間性を回復させる動きは発せず、依然としてそこにあるのは人間性を否定する動きのままと見られる。

「失くならんとするものを取り戻す唯一の方法は自己反省に外ならぬ」と大拙はいう。この指南にしたがえば、都会生活にある人々は、みずからの周囲にある動きが人間性を否定する働きであることを徹見した上で、それに漫然と浴したままでいてよいのかをみずから考え直してみる必要があるということになるだろう。換言すれば、都会生活を過ごしつつ人間性を維持してゆくには、都会生活の人間性否定の動きから退避できるような避難所を、各人で確保することが肝要となってくるのではないだろうか。それは休日に都会を離れて大地の上を歩くといったことであってもよいだろうし、都会にあっても見いだせる隔てなさを探して、それを味わうといったことでもよい。後者の例としては、たとえば、都会の中にも存する歴史的遺物を見に行く、詩歌や古典に親しむ、青空や星空を見上げるなどといったことが考えられる。そのようにして都会に暮らす人もみずからの行いに崇高さや威厳を帯びさせ、それを携えて都会生活へと戻ってくれば、都会の中にあってもわれわれは、大地や永遠性とのつながりを保ち続けることが可能となる。

大拙は次のように語る。「鳥が空を飛ぶと云ひますけれど、その実、鳥は大地の上を飛んでゐるのです。飛行機も大地の上を飛んでゐるのです。であるから、どうしても大地を離れることは出来ないであります」。都会の生活は大地から離れる傾向にある生活であるが、視野をより広くとれば、コンクリート建築物も大地の上であり、都会から出る廃棄物は大地に埋設され、都会で消費される食料や資源も大地から産出される。都会もやはり大地の上に築かれ、大地からの支えによって維持されているのである。

このように、大拙の「大地の思想」からは現代の、そして地球における人間のあり方について再考を迫る主張を見出すことができる。それでは地質学との接点については、これをそこからどのように見出すことができるだろうか。

4. 地質学との協同に期待すること

既に見たように、大拙は大地を人間的な生活全般を支え、また生み出す基盤として捉えている。そしてそのような基盤の具体的な例に岩石や土壌を含めていたことは疑いない。ただしその一方で、「自分の云ふ大地とは、精神的・霊的なもので余程有難いもの」とも大拙は語っている。したがって大拙の「大地の思想」を、その上辺だけとって即物的な観点から地質学との対話に持ち込むことは危険であろう。大拙の「大地の思想」は、「永遠性」とのつながりを人間がいかにして再発見し失わないようにするかということその本質とするものであるから、地質学との接点は、むしろ地質学と協同することで、いかに効果的に「永遠性」とのつながりについて、われわれはそれを現代の人々に向けて提示することが可能となるかという点にこそ求められるべきだと考えられる。

この点については、豊かな成果を地質学との協同がもたらすことが、大いに期待できる。日本列島には山岳信仰、岩石信仰の豊富な事例が残されており、自然と共生しつつ暮らす文化的、宗教的工夫も多数生み出され、継承されてきた。大拙の「大地の思想」もまたこの継承の上に築かれ、唱道されたものである。冒頭に紹介した原田による「新しい生き方」の模索は、継承されたこれら伝統と、それを支えてきた大地（地質）の知見とが総合されることで、具体性に富んだ実行可能な提言へと集約され、醸成されることになるだろう。

文献

- 原田憲一(1990):『地球について』。373ページ, 国際書院, 東京。
- 鈴木大拙 (1969): 大地と宗教 (『一禅者の思索』)。『鈴木大拙全集 第十五巻』。68-86, 岩波書店, 東京。(「大地と宗教」は講演としては1942〔昭和17〕年に行われ、翌1943〔昭和18〕年に『一禅者の思索』〔大東出版社〕に収録されて刊行された。)

